

コトバの変移（２）

—現代日本語管見—

戸村幸一

目次

1 はじめに	3 生まれてくるコトバ
1-1 現代史的時間内での変移	3-1 発音の変移
1-2 世代の累積による変移	〔以上、前回；以下、今回〕
1-3 「乱れ」と変移	3-2 語彙の変移
2 消えてゆくコトバ	3-3 語義の変移
2-1 小津作品に見るその時代の日本語	3-4 語法の変移
2-2 1960年頃の学生語	3-5 表記の変移
2-3 現代の若者から見た古風な表現	4 おわりに
	参考引用文献一覧

3-2 語彙の変移

我々は、必要な語がなければ、造るか借りるかする。ところで、語がなくてよそから持ってくるのは、造ることではなく、借りることである。借用語である。新語を造るか、他の言語から借用するか、その他に、自分たちの言語の古い時代から借りることもある。あるいは近隣の地域方言や社会方言から借りることもある。

造るとか借りるという行為は、多少は意識的なことだろうが、一方では、それを全く無意識のうちに仕上げてしまいもする。自分が話しコトバで使っている語を書きコトバの中に入れるのに何の躊躇も必要としないような時である。そのような区別がそもそも意識されていない使い手にとっては、それは当然すぎることだ。そこで、例えば、「ちがかった」や「いまいちわからない」などを書くのだ。国語辞典が「いまいち」に俗語表現と位相差をつけても、使い手には普通の語なのだから、そのまま書いてしまう。自分にとっては俗でも卑でもない、ごく並の語なのである。

なお、本稿では、外国語からの借用による語彙の変移については一切取りあげない。それに取りかかると、その先、借用による語法や表記の変移にも言及しなければならなくなる。実は、前回の「3-1 発音の変移」でも、借用語のある種の音を原語音で発音する傾向に関して、一切触れなかった。借用に関わる事象の検討は、おのずと別の稿を予測させる。それほどに、各分野への、外国語、特に英語の進出は顕著である。

3-2-1 「たちあげる」など

コンピュータ用語として「たちあげる」という複合語が登場してしばらくの間は、それが、自動詞「たつ」と他動詞「あげる」という次元を異にする語の複合であったために、

かなりの抵抗を感じた人・違和感を抱いた人が多かった。

「振り込め詐欺」という命令形＋名詞の複合に違和感を表明する人、「出来ちゃった婚」などは、文法範疇のことよりも、発想に品格がなくてと眉をひそめる筋もいる。

ところで、この「たちあげる」という語は、2000年11月発行の『岩波国語辞典』（第六版）には、すでに立項されている。その定義と用例は次のとおり：

機械システムに運転開始のための所要操作をして、稼働できる状態にする。更に広く、組織を機能し始める状態にする。「特別対策班を——」

コンピュータだけではなく、機械全般に使用できるという定義であり、また、派生義もすでに記されている。

翌2001年8月に発行された『日本国語大辞典』（第二版）にも立項されている：

①機械を稼働させる。特に、コンピュータを起動して、アプリケーションを操作できる状態にする。「パソコンを立ち上げる」②新しい企画、作業などをはじめめる。「新しい辞書の企画を立ち上げる」

こちらでは、①で「特に、コンピュータを～」と限定し、派生義を②で別立てにしている。大辞典として、それだけの容量がある、ということでもある。

そして、その後出版された国語辞典は、どれも上のどちらかのスタイルを踏襲しているようである。今日現在この語は完全に日本語の語彙に入っている。

3-2-2 「中食（なかしょく）」など

昨今は、生活万般の変遷に見合って、食文化の変遷も著しい。それに則して関連語がいろいろ登場している。

「中食」は〔チュウショク〕ではない。〔ナカショク〕である。こう発音するのは、多分「昼食」と区別するためであろう。一旦は〔チュウショク〕と発音されて、次いでそれが〔ナカショク〕に変えられたようである。

実は、「中食」は、1995〔平成7〕年に発行された『大辞林』（第二版）には、すでに「ちゅうしょく」という見出しで出ている。その語釈は：

外食に対し、惣菜・弁当などを買って帰り、家でする食事。また、その食品。

とある。そして『大辞林』（第二版）は、この語釈の後に「なかしょく」という表現も付け加えている。ただし「なかしょく」という独立の見出しはない。ところで2006年発行の『大辞林』（第三版）では「ちゅうしょく」の見出しは、カラ見出しとなって「なかしょく」へ送られる。そして、この「なかしょく」の見出しで第二版の「ちゅうしょく」の定義がだいたいそのまま記されている。なお、第三版では「外食・中食」に対する「ないしょく（肉食）」という見出しが新設される。その語釈は次のとおり。なお、ここに半角で記した「なかしょく」は、辞典では、縦組の本文中に割り注で組んである：

家庭内で調理して、食事をとること。また、その食事。外食や中食（なかしょく）に対していう。うちしょく。

『日本経済新聞』は「外食不況打開に挑む」と銘打つ3回連続の第1回目で、単にルビではなく、わざわざ「中食（なかしょく）」と読みを本文の中に組み入れている（2003年8月13日）。〔チュウショク〕がはっきり〔ナカショク〕に変身してきている。

「中食」は「外食」を意識して造語されたことは確実だろう。『朝日新聞』は「買った惣菜を自宅で食べる」ことだと説明し、今人気だとも付け加えている（2006年3月13日）。ここでは「なかしょく」とルビが付されている。

すでに今から10年以上前に〔チュウショク〕という語があったのだが、ほとんど普及していなかった。しかし、21世紀に入って同じ表現を〔ナカショク〕と発音することによって「昼食」と区別し、かつその内容を生産者側も消費者側も、さらに積極的に受け止め、そこに関わってゆくことになった、というのが真相なのだろう。

さらに、『日本経済新聞』のその「外食不況打開に挑む」の第2回目では「中食」の複合語として「中食ビジネス・中食市場・中食サービス・中食事業」を上げる（2003年8月14日）。「なかしょく」の活躍の場の広がり、これではっきりする。

最近の家庭生活の変化・伝統的食生活の変貌に伴っていろいろの新語が登場している。「孤食・個食」など、かつてなかった語を採録する辞典もある。

『三省堂国語辞典』（第五版）（2001年発行）では、「孤食」は、

〔親がはたらいでいたりして〕子どもが、ひとりだけで食事をする。

とあり、「個食」の方は、

家族のひとりひとりが、ちがう時間帯に（ちがう食べ物の）食事をする。

とある。これに対して『大辞林』（第三版）では、「個食」の見出しのみを立て、そこで「孤食」とも書く、と注記した上で、

家族がちがう時間に一人一人食事をとること。また、一人分や一食分に小分けされた食品。

と語釈する。「個」と「孤」は分離しにくい概念であることが示されている。

3-2-3 旧方言と新方言

既存の方言が消滅する一方で、新しい方言が生まれてきている。

例えば、室町時代以来使われていた「行かなんだ・知らなんだ」という関西弁の「～なんだ」が、最近若者の間では使われなくなった、ということが国立国語研究所の調査で判明した（『朝日新聞』、2002年2月5日）。因みに、『日本国語大辞典』（第二版）の「なんだ」の項の用例中、最古の文献は1477年の『史記抄』である。

テレビ・ラジオの影響で、既存の方言が消滅し、共通語が大幅に普及している、というのは事実である。だが、その一方で、新方言すなわち、共通語にはないが、特定地域の若者に特有の語彙が誕生してきている。つまりは、若者特有の社会方言であり、地域方言でもある。その例を、首都圏の若者に通用している語から、少々あげてみる。

あおたん〔＝打ち身のアザ・内出血の痕〕

うざ(った)い〔＝面倒だ・わずらわしい←濡れた畑に入る時のいやな感じを表わす
奥多摩方言が1980年代に都内の若者語となる〕

(かっ)たるい〔＝だるい・やる気がしない←これも1980年代に若者語となる〕

きもい〔＝きもちわるい←1970年代末には使われだしていたようだ〕

けばい〔＝けばけばしい←1980年代〕

ちがかった〔＝違っていた←北関東から入ってきた〕

ちった〔←ちゃった←ちまった←てしまった〕

また、例えば熊本の若者には次のような語が通用している。

あくしゃうつ〔＝困る・むかつく←あくしゃあ「迷惑・困惑」+気がふさがる・その
状態になる〕

ごちい〔＝体格がいい←ごつい〕

しにかぶる〔＝死ぬほどつらい←死を身に受ける〕

3-2-4 助数詞の変移

助数詞の衰退・変貌も著しく、最近の日本語の変移項目に入る。年齢に関して「彼とは2歳違う」ではなく「2個違う」などと言う。金原ひとみ(1983〔昭和58〕年-)にも、そんな表現がある。

「アマは十八歳だったって事。(…)私は十九歳で、アマの一個年上だった。」

(金原ひとみ『蛇にピアス』, p.113)

この年齢差の言い方に関しては、文化庁の『平成15年度国語に関する世論調査』に次のようにある(pp.46-9)。すなわち「1コ上」式の言い方をするというのが、全国平均では50.8%に達しており、7年前の調査よりも9ポイントあがったという。ただ、60歳以上では20.0%と数値は低いですが、20代では88.2%もあって、世代差が顕著である。なお、性別ではほとんど差が見られない。

箸を「1膳」ではなく「1本」とか「1個・ひとつ」などと言う。年配の客の「箸二膳」に、コンビニの50代女性店員が「箸二つ」と対応したり、学生が「箸一本」と言って、年配の店員からたしなめられた、というのが現実である。「皿」を1枚ではなく、1個と言い、「カラス」や「ニワトリ」を1羽ではなく、1匹と言う。

個別に語彙を割りふるよりも、語彙を節約する、すなわち、画一的にまとめあげる方が効率がよい、という発想がその根底にはあるようだ。

この項は、「2 消えてゆくコトバ」に入れることも可能だが、既存表現が消え、その後の新表現という点から、この「3 生まれてくるコトバ」の側に入れる。

3-2-5 読みの変移

例えば「カナシイ」という和語は「悲しい・哀しい・愛しい」と書くことができる。ひとつの語に複数の表記が可能である。一方、漢字は日本語表記では、一般に複数の読みを前提とする。漢字は常に読みの変移にさらされている。例えば『岩波新漢語辞典』（第二版）は「生」という親字に、音読みは「セイ・ショウ」の2種類を記すだけだが、訓読みは「いきる・いかす・いける・うまれる・うむ・おう・はえる・はやす・なる・なす・き・なま」の12種類、さらに、名乗りとして「お・なり」の2種類を掲げる。

だがこれだけではすまない。姓の「生田」は「イクタ」、名の「生子」は「イクコ」である。「ウブな人」は「初な・初心な」と共に「生な」の表記もある。

いっそ、もっと極端な例「博多の女（ひと）」や「二人連れ（アベック/カップル）」をあげよう。

又「憧憬」が「ショウケイ/ドウケイ」,「出生」が「シュッショウ/シュッセイ」,「固執」が「コシュウ/コシツ」など、本来の読みと慣用読みが並立している場合もある。ただし、慣用の読みしか知らない人もいる。

3-2-5-1 「イチダンラク/ヒトダンラク」

1999年夏に、また2002年4月に、NHK ラジオでアナウンサーが「イチダンラク」ではなく「ヒトダンラク」と発音するのを私は聞いた。『NHK ことばのハンドブック』は、その「はじめに」に記してあるとおり、「NHK のアナウンサーや放送に携わるスタッフがことばについて迷ったとき、よりどころにしてきたもの」であり、ここでは、もちろん「イチダンラク」という読みが採用されている。

この語に関して、書かれたものとして私が初めて見たのは「里での農作業がひと段落すると」というものである（『山と溪谷』, 2002年5月号, p.56）。この文の筆者は1943年生まれとあったから、その頃もう還暦に近い年齢の人である。漢字で「一段落」ではなく、平仮名で「ひと段落」と書いている。もう前々からそう口になっているのだろう。文字化させる前に、脳裏に浮かんだ音がこれであったのだ。

次第に「ヒトダンラク」になっていくだろう、と思っていた矢先、『読売新聞』に、「一段落」を「ヒトダンラク」と発音する傾向が強くなってきているが、「イチダンラク」が本来の読み方だと、わざわざ指摘する記事が出た（2002年5月23日）。そしてここでは、類似の意味を持つ語「一区切り」に引かれるのだろうとも記している。

「一苦労・一勝負・一通り・一風呂・一休み」など、意味はともかくも、「ヒトー」と発音する語は多い。もちろん、「イチー」も多いが。

3-2-5-2 「ダイジシン/オージシン」

「大地震」の読みは、すでに両方の発音で通用しているが、NHK では、「オージシン」と発音することにしている。ところで、NHK 放送文化研究所が1989年に実施した調査では、77%の人が「ダイジシン」と答えたそうだ。これは、同じ漢字を使った、同じ自然災害関係の語「大震災・大災害」の読みに関連しているのだろう、とも付記している（『NHK

ことばのハンドブック』, p.354)。

気象関係の語「大雨・大風」を読み間違えることはないだろう。災害のひとつである火災関係の語「大火事」は〔オオカジ〕だが、「大火」は〔タイカ〕である。

「大多数・大部分」は読み間違いも起きないだろう。だが「大規模」は〔ダイキボ〕だけではなく、〔オオキボ〕とも読まれていそうだが、どうだろうか？「規模が大きい」というところをひとまとめにすると、そんな発音になってしまいそうだ。

3-2-5-3 〔サンガイ／サンカイ〕

「三階」の発音は最近急速に変移しているようだ。文化庁の『平成15年度国語に関する世論調査』に次のようにある (pp.34-9)：

〔サンガイ〕と発音するのが、60歳以上で70.4%，20代が42.1%である。

〔サンカイ〕と発音するのが、60歳以上で22.6%，20代が54.8%である。

さらにまた、この数値を6年前の同じ調査と比べると、

〔サンガイ〕の割合が10ポイント減っているのに対し、

〔サンカイ〕の割合が10ポイント増えているという。

新規の発音〔サンカイ〕がかなり急速に増大しているのが分かる。なお、どちらの年代でも性別の違いはほとんど見られない、とも記されている。

「三階」以外は〔-カイ〕としか発音しないのだから、それからの類推 (analogy) で〔サンカイ〕となったということだろう。「たそがれ」は、そもそも名詞でしか存在しないのだが、「取り入れ」が「取り入れる」から派生したのだから「たそがれる」という動詞もあるはずだ、というのと同じ類推である。

3-2-5-4 〔フンイキ／フインキ〕

上に見てきた語とは違って、これは音位転換 (metathesis) の例である。「山茶花」が〔サンサカ〕から〔サザンカ〕となった類の語である。フランス語の fromage 「チーズ」も、もとは forme 「チーズ製造の型」に由来する formage であった。

「雰囲気」を若者がこの頃〔フインキ〕と発音するようになった、と書かれた雑誌記事を私のゼミの学生たちと授業中に読んだことがあった (2006年10月24日)。さて、その日出席の8人中の2人 (MH君・KAさん) が、その発音は、小学校の授業でそう指導された、と口を揃えて言った。なお、2人とも千葉県で育った人である。

もしそうなら、多分そうなのだろうが、すでにその小学校の先生がそう発音していたということになるわけだ。ということは、10年以上昔からその発音はあったということだ。となると、小学校のその先生はどこでそのような発音を身につけたのだろうか？

3-2-5-5 〔テージロ／ティージロ〕

今度は、文字への誤解が原因で発音が変わると同時に文字も変更された例である。

「丁字路」が消えて「T字路」が誕生した、という話である。〔テージロ〕が消えて〔ティージロ〕になった。これは発音の面にまず変移が起こり、それに見合って表記面にも変移現象「丁→T」が発生したとも言えるが、文字「丁」に見合った発音ができないことに、問題があるとも言える。「丁」を「T」と同一視した。だから、これは発音の面と表記の面

とに同時に発生した変移現象である、と言う方がいいだろう。

この現象の発端を示す話はこうだ。中学校の先生が授業中に「テージロ」と言って、生徒たちから「ティージロ」と訂正された。そして、先生の方もそれを簡単に受け入れた。以上は『言語』1989年3月号「談話室」への読者からの投書による。

この現象は過剰訂正 (hypercorrection) の例だとも言える。カスティーリャ方言には [θ] と [s] の2種あるが、南方のアンダルシア方言では前者を欠く。そこで、si でさえも [θi] と発音することがあると言う。これも過剰訂正である。

だが今問題にしているのは、この「丁」という漢字を知らない層から出たのかもしれない。「丁」という文字は教育漢字、つまり、常用漢字1945字の内、小学校で読み書きを学習する996字に入っており、学年別配当表で3年生の学習とある。その「丁」が無視されている。因みに十干の「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸 (こうおつへいていはきこうしんじんき)」のうち、下線部「戊庚壬癸」の4字が常用漢字表外である。

上の中学生たちに、この「丁」の文字への認識がなかったかどうかと問う前に、彼らには「ティーシャツ」との連関しかなかったということだろう。それほどにカタカナ語の方がそばにあるということだ。以上「テージロ」は、英語の発音と文字へのすり寄りの例として、ここに引いておきたかったものである。

この「T字路」は今では短歌の中でさえまかり通っている。『朝日新聞』の「朝日歌壇」にこの「T字路」という表現を含む短歌が掲載されていた。しかも、同一作品が二人の選者から同時に採用されていた(2006年6月5日)。もっとも、その短歌での発音が「テー・ティー」のどちらなのかは、字面だけでは分からない。

さて、先の『言語』誌の投書者は、すでに『大辞林』の「丁字路」の項の語釈の中に「T字路」と記載されているのに触れて、「今後、『T字』を掲載する辞書が増えるとか、あるいはまた、『T字』を本見出しにする辞書が出て来るかもしれない、と思うのは考えすぎでしょうか」と結ぶ。だが、1989年のこの投書は杞憂ではなかった。2001年発行の『日本国語大辞典』(第二版)は「丁字路」の見出しに対し「現在は『T字路』と書くことが多い」と注をつけている。この場合には「丁」でも「T」でも、「テー」と発音するということだ。上の短歌の場合もこの仲間なのかもしれない。

前にも断ったが、本稿では、現代日本語の中に占めるカタカナ語の問題を取りあげなかった。しかし、この項にいみじくも現れたように、今は、在来文字よりも新来文字の方に犯されているのだ。カタカナ語の氾濫はカタカナ語の反乱でもある。

「輿論」の「輿」が、当用漢字でも常用漢字でも表外字で、その代替で「世論」と書く。そこから読みが「ヨロン」だけではなく「セロン」ともなったのも同様である。文字が先行した読みの変移である。

3-3 語義の変移

ここでは「鳥肌が立つ」のように、原義が転義を生み出した表現、「情けは人のためならず」のように、旧来の解釈が新規の解釈に変わった表現などをみることにする。

3-3-1 「鳥肌が立つ」など

この「鳥肌が立つ」の転義表現は、すでに2000年夏のシドニー・オリンピックの報道で

NHK アナウンサー有働由美子が使って耳目を集めたものである。

イチローが大リーグ新記録の年間258安打を達成したことを報じる『朝日新聞』（2004年10月3日）の記事に「仰木さんは（…）『鳥肌が立つような興奮でジーンときた。（…）』と感激の面もちで語った」とある。「仰木さん」は、元オリックス監督で「イチロー」の名付け親。2005年12月に70歳で亡くなった。

この3日ほど前にも、イチローの応援に駆けつけた若い日本人女性グループのひとりがNHK テレビの取材に「鳥肌が立ってきた」と興奮状態で答えていた。

2000年11月発行の『岩波国語辞典』（第六版）は、すでに「近ごろは、感激の場合にも言う」と注記している。2001年3月発行の『三省堂国語辞典』（第五版）には、この転義に関する記述はまだない。

2001年9月発行の『日本国語大辞典』（第二版）は、「とりはだ」の中見出し「とりはだがたつ」は「とりはだだつ」に同じとして、後者「とりはだだつ」の項で、本義と転義を一括して掲げている。それは次のとおり：

寒さや恐怖、また、興奮や感激などの強い刺激によって、皮膚に鳥肌ができる。

このように本義と転義を一括したためでもあろうか、「とりはだがたつ」の方の用例に次のようなものがある：

健は身体に鳥膚が立つ程興奮を感じた。

他の辞典では転義扱いだが、『日本国語大辞典』（第二版）は本義と転義を別立てにしないのだから、これはこれでよい。だが実は、この用例の出典は、小林多喜二（1903〔明治36〕－33〔昭和8〕年）の小説『不在地主』である。これが書かれたのは1929年で、『岩波国語辞典』（第六版）の注記に大いに反している。

『明鏡』（2002年12月発行）には、本義に関する記述があるだけだ。『明鏡』の編纂方針に感じられる規範意識がここにも現れている。2006年発行の『大辞林』（第三版）は、本義に対する注釈扱いにするため、カッコに入れて記し、用例を添える：

〔近年では深い感動を覚えた時などにもこの表現を用いることがある。「名演奏に感動して鳥肌が立った」〕

今、数冊の辞典の記述に立ち入ったが、辞典の発行順や発行年、更に辞典の規模の大小だけでその内容を云々できないのは、あまりにも当然だ。各辞典にはそれぞれの編纂意図があり、語釈や、引例の基本的な方針がある。そこを承知で、時間的に相次いだ刊行物の内容を比較し「鳥肌が立つ」の転義が近来とみに目立ってきたことを確認した。

ともかくも、寒さという外圧から起こる生理現象だけではなく、恐怖という内圧から起こる心理現象をも、この表現は請け負うことができたのだ。興奮や感激や感動も、恐怖と同じ心理現象なのだから、転義を生じる可能性はすでにそこに存在したのだ。

このように新旧の解釈が並立する例として、「話のさわりのところ」の「さわり」や

「耳ざわり」を「よい」と結びつけた場合の「耳ざわり」など、まだいろいろある。

3-3-2 「情けは人のためならず」など

諺「情けは人のためならず」に関し、かつてNHKが東京100キロ圏内の16歳以上の男女1800人を調査したことがあった（『朝日新聞』、1993年7月31日）。そこでは、

他人に情けをかければ、いずれ自分へ良い報いとなって帰ってくるのだ。
という正解ないしは旧解釈が37.1%なのに対して、

人に情けをかけることは相手のためにならないから、かけるべきではない。
という誤解ないしは新解釈が53.3%という結果が得られたそうだ。

この新解釈の動向を追跡するために、私はこの項目を、以後ほとんど毎年、学生にたずねてきた。それによると、年を追うごとに新解釈の支持率の増大が分かる。そして、現在の最終結果は、旧解釈の方が34.1%、新解釈の方が60.0%となっている。

この10数年間で、旧解釈の支持が3%減り、一方で、新解釈が6.7%増えている。NHK調査では旧解釈と新解釈の和が90%余だったから、「分からない」が10%近くいたわけだ。それに対し、私の調査結果の旧新両組の和は94%少々だから、「分からない」は6%ほどだ。新解釈を積極的に支持しているのが若干多いと言えそうだ。

文化庁『平成12年度国語に関する世論調査』も同様の試みをする（pp.78-80）。全体平均では旧解釈が47.2%、新解釈が48.7%と接近しているが、16～18歳に限ると、旧解釈が35.8%、新解釈が54.7%と開きがはっきりしている。

このような解釈の変移の根底は、社会全体の移り変わりに付随した価値観の変遷と軌を一にしている、という点で説明がつく。さて、この諺は謡曲『葵の上』にもある古い表現だ（『謡曲大観』、第一巻、p.161）。諺の中では生命力の強い方だ。

もちろん学生の中に旧解釈を知りかつ新解釈も心得ている者はいる。だから、英語の諺<A rolling stone gathers no moss.> 及びその日本語訳の「転石苔を生ぜず」のような、又「犬も歩けば棒に当たる」のような二義所有で残るかもしれない。だが、これら両義に通じている者は稀だ。「情け～」もいずれ新解釈のみになるだろう。

ところで、このような表現の衰退は、今の若者が子供の頃、いろはがるた遊びをしなかったという事実や、そもそも、いろは歌を知らないことと、通底するところがありそうにも思える。「兎おいしかの山」や「帰ってみればこはいかに」などの文語表現が正しく解釈されなくなってきたことにも関連があるのだろう。

さて私は、上の調査と同時に、次のような表現に関しても質問を試みている。ここでも新解釈の優勢が目立つ。

「気が置けない」は 旧解釈の「遠慮しなくていい」が 19.0%に対して、
新解釈の「油断がならない」が 64.6%である。

「役不足」は 旧解釈の「当てられた役が軽い」が21.8%に対して、
新解釈の「力不足で勤まらない」が74.1%である。

「こだわる」は 旧解釈の「些細な点が気になる」が30.6%に対して、
新解釈の「好みの追求」が 68.7%である。

この3つの表現に対する回答は「分からない」と答えたのが「気が置けない」の場合で、16.4%と群を抜いて多く、他は4.1%と0.7%ではるかに少なくなる。新解釈と旧解釈の間

で一番開きがあるのが「役不足」で、新解釈が旧解釈よりも52.3%も多く、「気が置けない」が45.6%となる。「こだわる」は38.1%で、その開きが、他よりも少なくなってきた。そうは言っても、新解釈が圧倒的に優位である点は変わらない。

「川立ちは川で果てる」や「曳かれ者の小唄」という成句が理解されないことに平田禿木（1873〔明治6〕年－1943〔昭和18〕年）が閉口したのは、1943年のことだ。しかも、四十がらみの人にして理解できないのだから、若い人への説明には外国人に対するような注意工夫が必要だ、とも彼は述べている。これは、その年彼平田が『樋口一葉全集』の編纂にあたり、その時からわずか40数年前の『たけくらべ』（1896年）がもはや相当細やかな注を必要とすることを嘆いての文の中にある（『全集樋口一葉』、別巻、p.425）。信じられない気がするが、それが真相なのだろう。

3-4 語法の変移

3-4-1 「～かねる／～かねない」など

次の例も慣用表現の誤解から出たものである。JRの車内放送で、私は「携帯電話の御使用はまわりのお客様の御迷惑となりかねますので御遠慮ください」という案内を聞いた（1997年6月17日）。

これは明らかに「～かねる／～かねない」に対する、この使用者の誤った理解に起因する。「～かねませんので」という車内放送も私はもちろん聞いている。ともかくも、車内放送用マニュアルはこうのはずで、それを独断変更したのが上の場合だ。

ただこの「～かねる／～かねない」には微妙なものがある。例えば、「こんなに沢山の御馳走出していただいても、私には食べかねますねえ。」という場合は「食べられない・食べきれない」という否定を表わすのだ。これと、上で表現したい「迷惑になる」という否定的内容とが混同されているのではないかと。また、表向きは否定表現の「こんなに沢山の御馳走だって、奴さんなら食べかねませんよ。」という場合なら、全体としては「食べてしまう〔かもしれない〕」という肯定的内容なのである。

先に記した半疑問型発音や後述のラ抜き表現に対して抵抗感を抱く年配者は多い。このように世代差という観点から、日本語の語法に関して、世代間の開きの大きいのを探すと、次のようなものがある（『平成15年度国語に関する世論調査』、pp.46-9）。

「あの人みたくなりたい」の「みたくなりたい」という表現を認めるのが、

60歳以上で9.5%、20代が44.3%である。

この時の調査で世代間に一番開きの大きいものがこれである。次の語法は、60歳以上も使うが、若い人たちが多用しているのがよく分かる。

「すごい速い」という表現を認めるのが、

60歳以上で34.4%、20代が72.9%である。

在来の表現「すごく＋用言」がかなり脅かされている。

3-4-2 「～されたし」の2つの意味

語法の新旧ということなら、この表現の場合も興味深い観点をはらんでいる。

急用を思いついた母（49歳）が「家に電話されたし」と娘（高1）の携帯にメールしたが連絡がなかった。そして、その娘が帰宅して「TELされたしーって、誰にTELされた

の？」と母に聞いたという。(『朝日新聞』, 2003年5月31日)

母親のこの文語表現が、娘には全然伝わっていない。娘の理解度は「アタシー↑B子にCD貸して無くされたしー↑今度は悪口言われたしー↑」などという表現と同じレベルなのだ。「しー」がその前よりも高く強く、しかも伸ばされている。「誰にTELされたの？」の末尾も、その前よりも高く強く、そして伸ばされていたはずだ。

これは、ここの「3-4 語法の変移」よりも、前の「3-3 語義の変移」に入れたくなるかもしれない。母の文語表現が娘には全然伝わっていない。娘の側では単に語義の問題としてしか捉えられていないのだ。だから、娘は電話をしなかったのだ。だがやはり、母の表現意図が伝わっていないのは、「語法の変移」である。

諺の理解度の変化は、いろはがるたの消滅にも関係があると先に述べたが、これは当然、文語表現の衰退にも関わる。例えば、「行くべきか行かざるべきか」と言えないから、その後半は「行かないべきか」などとなるのである。

<「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日>に代表される俵万智(1962〔昭和37〕-)の歌集『サラダ記念日』が世に出る(1987年)と、与謝野晶子(1878〔明治11〕-1942〔昭和17〕年)以来の短歌史上の快挙と推奨する側と、口語で短歌は詠まれないと忌避する側とに、大きく二分された。しかし、その後の俵万智の活躍も含めて、そしてまた、歌を詠む多くの人たちへのその影響をも含めて、現代短歌の中の、文語調から口語調へという歩みの強さを拒否する人は、もはやいなくなっている、と言えるのではないか？ ○○の衰退というマイナスの現象と裏腹に、○○への歩みというプラスの現象もある。時間は絶対に逆進しない。

3-4-3 「ラ抜き」など

「ラ抜き」の表現は、最近急に若者語に登場したのではなく、すでに昭和初期にも存在したとか、あちこちの方言にも多様にみられるとか、いろいろ言われている。これらを簡潔にまとめたものとしては、川口・角田『日本語はだれのものか』のpp.26-7を参照のこと。又、様々な文学作品に早い時期から見られることも多くの人によって指摘されているし、私の手元にも10例ほどはある。そのひとつだけを次に引く。宮沢賢治(1896〔明治29〕-1933〔昭和8〕年)の『銀河鉄道の夜』(未定稿のまま死後発見。1927年頃の作と推定)に、次のような例が見られる。かなり早い時期のものである。

「二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないやうに走りました。そしてほんたうに、風のやうに走れたのです。息も切れず膝もあつくなりませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけれると、ジョバンニは思ひました。」

(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』, p.259)

3行目の「かけれる」が「かけられる」とならないのは、それに先立つ「走れた」と「かける」という下一段活用動詞に牽引(attraction)された表現で、やむをえないようにも思える。その傍証になりそうなものとして、『日本国語大辞典』(第二版)には「見れる」の見出しがある。そこには「見る」の可能動詞で、本来「見られる」だが、「書ける」「帰れる」など、下一段活用で可能の意味をもつ語に引かれてできたものだと説明して、葛西

善蔵（1887－1928年）・川端康成（1899－1972年）・花田清輝（1909－74年）の例をひいている。

ともかくも「やめられる＞やめれる：やめられなかった＞やめれなかった」や「食べられた＞食べれた：食べられない＞食べれない」など、ラ抜きコトバは現在では広く使用されている。今の日本語の中に地歩を築いていることは確かである。

それは、話しコトバだけではなく、書きコトバでも、使われるようになってきた：

似合うように着れるか着れないかは(…)（笹島寿美『キモノのしたく片づけ』p.23）

だが今日現在でも、テレビカメラの前で人がラ抜きで話をした場合、対応するテロップの方は「ラ入れ」で文字化されるのが普通だろう。また、ワープロにラ抜きの表現を入力すると「これは正しい表現ではない」と、ラ入れ表現への変更をうながす装置もある。つまりは、ラ抜きがまだ全面的に市民権を得ていないのも事実だ。

しかし、これは時間の問題にすぎないとも言えそうだし、今日現在では、若年層にしばって言えば、彼らの間では、ラ抜きはすでに認知されていると言えるだろう。それほどにこのラ抜きは、現代の日本語の中で顕著な変移の事例のひとつと言える。

2007年3月24日の能登半島地震の老被災者が翌日のテレビニュースで「夕べはよく寝られなかった」と話したが、そのテロップでは「寝れなかった」となっていた。テレビ局の若いスタッフは、日頃、ラ抜きの話者である。

直前の3－4－2の「～されたし」も含め、先に見た発音関係のいろいろの変移と共に、語法でのこのラ抜き表現は、現在から未来へと向けて、日本語を大きく変貌させてゆく特徴のひとつとなるものである。

次に「レ足す」コトバについて少々記す。これは「書ける／読めない」の類を「書ける／読めれない」と「レ」を挿入する語法である。ラ抜きのような音の削減と逆に、音の増加である。そして大切なことは、これら、ラ抜きとレ足すで、レルの平準化が行なわれるのかもしれない、ということである。

「寝 ら れ る」 > 「寝 れ る」

「書け る」 > 「書け れ る」

そして又、これらに次いで若者に頻用されているのが「サ入れ」コトバである。文化庁『平成14年度国語に関する世論調査』によると「あしたは休まさせていただきます」という表現に関して、16～19歳の男性で60.0%が、女性で43.9%が、気にならない、という(p.31)。元来の使役の「～させて」に、更に「さ」がついて「これからコンパを始めさせていただきます」とまで言ってしまう。

今度は「トカ弁」について。これが使われだしたのは、1980年ごろからだ『岩波国語辞典』（第六版）は記す。『読売新聞』も「新・日本語の現場」と題する連載記事の第3回めで、この表現が広まったのは「80年代とみていいだろう」と述べ、「移り変わりの激しい若者用語としては異例なほど長命だ」とも書いている（2002年5月15日）。さらに、この記事の続きには「ねえ、手とか、つないでみる？」（同16日）という表現や、「私、OLとかやってます」（同17日）という言い方も記されている。この記事から数年を経た今日「トカ弁」も定着した感を否めない。ここには、心理的に何かを隠蔽しようとする気持ち

があるのだ。それが何であるかを悟られたくないから、冗長な表現にしようという気持ちになるのだ。

さて「マダ未定だ」をより正確な伝達を目指す余剰性 (redundancy) の1例として、そして「今日は天気だ」をより簡潔な伝達を目指す経済性 (economy) の1例として、挙げる。同様に「ラ抜き」は経済性が作用し、「レ足す」や「サ入れ」は余剰性が作用していると言える。「私は分かりません」のフランス語は、かつては *Je ne sais*. だったが、伝達効率を上げるために *Je ne sais pas*. となり、次いで簡潔表現にしようと、俗語で *Je sais pas*. が生まれたのだ。それと同じ変移である。

上の「トカ弁」も余剰性の表現のグループに入るのがよく分かる。しかも、これは曖昧表現にもくみしているものだ。

最後に「的」の用法拡張に一言。「ほく的・わたし的」は間違いと62%の若者が認めるがそれでも使う、というのが55%いるという(『朝日新聞』, 2002年11月3日; 拙著『コトバ——音と文字の間』, pp.9-10)。この語法も、これからの日本語の中ではかなりの力を発揮するもののようだ。というのは、「色的・音的・仕事的」など、生産的な語法であるから。

3-4-4 敬語の変移

大の大人でさえも、会議の席上などで改まって、しゃっちょこばって発言するとなると、「私の御意見を申し上げます」とか「以上、私からの御要望です」とか「授業に1時間も遅れて遅刻する学生がいられます」とか「登録しないで受講を受けていられる方がいらっしゃいます」などと、平気で言っている。

社会経験を積んだはずの大人でさえもこうなのだから、敬語の正しい使い方を教えてください、と学生が悩むのも無理がない。コトバの習得は習うよりも慣れろだと言っても、若者の気は晴れない。時間が惜しいのだ。早く知りたいのだ。対話する場に一刻も早くびたりとはまりたいのだ。

このように対話の場の力関係が未熟な学生だから、例えば飲食店などで「いらっしゃいませ! おタバコ吸われますか?」と聞かれて「吸われません」などと答えることになるのだ。「お名前は?」とか「お仕事は?」と聞かれて、「お名前(お仕事)は〇〇です」とつられて答えるのも同じことだ。

以上のような事例はよくあることだが、これらには、発話者が慣れていない場での発話行為とか、対話者同士が緊張している場での対話行為とかが説明のカギになりそう。となると、やはり、場数を多く踏むしか手がないだろう。普段、ため口をたたいているのに、急に敬語を使えと言われても、それは無理だ。

現代日本語では待遇表現(敬語体系)の単純化が進んでいる、と言われるが、そこには、敬語使用意識の変貌が潜在しているのだろう。つまり、日常の生活で相手への敬意の低下という心性があり、また一方で、敬語統辞法を厄介だと感じる心性がある、これらが相乗しているらしいのだ。

さて、もうひとつ別の現象がある。話し手と聞き手の関係によって、使用する親族語彙を変えるか(相対敬語)、変えないか(絶対敬語)、という敬語使用の場にも異変が起きてきている。約2万人の高校生が受験した日本語運用能力検定で、他人に対して身内のこと

を言う場合、例えば自分の母親を、相対敬語「母」ではなく、「お母さん」と絶対敬語で言う方が正しい、と90%が思っているという結果が出た（『読売新聞』，2001年5月28日）。その原因は若者の幼児化にあると指摘する向きもある。少子化社会の親子関係がコトバに影響を与えるのは大いにありうることだ。

その結果、相対敬語が消えてしまい、絶対敬語一本槍になるかもしれない。もちろん、そのような敬語体系の言語は現に存在する。日本語でもかつて、一定の人物に常に敬語を用いるという時代が存在した。

ただそれとは別個に、消費社会で、お客様は王様だの意識で、商業敬語系統の過剰なまでの敬語使用もある。この過剰使用の強制は個人の発話にも影響を与えることになるはずだ。職場でせっかく覚えた敬語表現を外でも使わないという手はない。

「お座りになられる」のような二重敬語を避けることとか、「～のほう」や「よろしかったでしょうか」などの「ファミ・コン言葉」は使うなとか（『日本経済新聞』，2005年7月2日）、このような接客を念頭にした言葉づかい指南の記事もよくみかける。

この「よろしかったでしょうか」については、『朝日新聞』がすでにそれを「ファミレス・コンビニ方言」と名づけて、その全国分布・用法・使う側及び聞く側の受け止め方に関する詳細な記事に乗せている（2002年3月25日）。

これに類似の表現に次のようなものがある。いずれも2006年春、病院での看護師たちの患者たちに対するコトバである：

今のうちにお薬飲んでもらって大丈夫ですよ／点滴始めますから、ベッドに横になってもらっていいですか？／間もなく治療室に入りますから、今のうちにトイレに行って待っててもらっていいですか？

年配者の側からすれば「～してください」と言われて、ちっともかまわないのだが、若い発話者の側からすれば、それでは、命令口調になってしまうと思えるのだろう。コミュニケーションの意識の根幹が変わってしまっているのだ。

「謝罪〔いた〕します」で十分なのに、「謝罪させていただきます」と言う。これはそう言わざるをえない、そう言った方がよい、とみなす社会が、まず存在するからだ。そのような状況から発せられているのだ。ともかく、人間関係の捉え方が変わってきているのだから、そこで出されるコトバも今までの語法では不十分なのだ。新しい敬意の表わし方が生まれてくるのだ。

3-5 表記の変移

私の生きてきた時間の中で、私の母語日本語には、文字表記の面で2回大きな変革があった。そしてそれは、単に文字表記の面だけでなく、当然、言語生活全般の変化にも及んだ。なお、狭い意味の表記法・正書法だけでなく、書きコトバ・文章表現のレベルにも、この項で言及する。

第1回めは、戦争直後、1946〔昭和21〕年告示の当用漢字表や現代仮名遣いなどによる表記法改革、次は、1981〔昭和56〕年の常用漢字表の告示とそれに後続するワープロやパソコンなどのIT革命による表記法改革を開始点とするものである。どちらも、日本の歴

史上まさにエポックメイキングな、激動の時代と重なる。どうしても、コトバが変わらざるを得ない時であった。半世紀とも隔たらない時の出来事である。むしろ後世には、一括りにして語られるかもしれない。片や戦後処理、片や情報革命という、異質のものでありながらも。いや、どちらも意識の改革という共通項を持っている。

戦前から改革しようとして、戦後になって果たされた国語改革、それは実はほとんど表記法の改革が中心であった。

当用漢字表は、1850字からなり、1946年に告示されたが、制限色が強かった。あるいは、強いと認識せざるをえなかった。これと同時に、定家仮名遣い・旧仮名遣いは、現代仮名遣い・新仮名遣いに変更された。

常用漢字表は、1945字からなり、1981年に告示され、使用上の目安と理解されるようになった。従って、必然的に使用漢字の増大を招くことになった。ワープロの普及は漢語の増大につながった。詳細は省くが、人名用漢字の増大も著しい。

戦後、公用文が「漢字片仮名交じり文」から「漢字平仮名交じり文」へ移行した。小学校で平仮名を片仮名よりも先に学習するようになった。それは、漢字と片仮名の交ぜ書き（例：雨ニモ負ケズ）の衰退にもつながる。それは、古くからあった男文字の系列の消滅でもある。朝日俳壇で＜ムギアキハ月ニシロガネ日ニコガネ＞（東京・坂東孫太郎）という投句に対して選者金子兜太（1919〔大正8〕-）は＜麦秋は月に白金日に黄金＞の表記より神秘的な後味を残すと評した（『朝日新聞』、2006年6月5日）。

なお、現在我々は日本語の表記に漢字・ひらがな・カタカナ・アラビア数字・アルファベットの5種類の文字を使っている。例えば「2月16日のNHK テレビ番組で…」など。ローマ数字やギリシア文字は記号の類に一括してよいだろう。

3-5-1 表現の変移

ひとつの象徴的なことをここでは記す。ワープロの功罪の罪の方である。

かつて、私はある講座のテーマに関して「日本語の変様を観察する」と手書きで回答したことがあった。後になって配布された、他の発表者とのテーマ一覧リストには「日本語の変容を観察する」とあった。ワープロで「へんよう」と入力しても、「変容」としか変換されないのだろう。そう察して試してみたら、そのとおりだった。ワープロでは「変様」は素直には、一遍では、受け付けてくれないのだ。このようにワープロ使用時の変換による文字表記の制約はいろいろ経験することだ。

「言語思想論」という講義の内容を考えようと、〔ゲンゴシソウロン〕とその題を繰り返しているうちに、「言語史総論」という文字が私の脳裡に浮かび出てきた、その経験は他にも書いた。機械だけではなく、脳内にも変換ミスの装置があるのだ。それが日本語の表記に関わる実情だ。

さて「変容」と「変様」はどう違うのか？ まず何はともあれ、『日本国語大辞典』（第二版）を見ることにする：

「変容」 姿や形、また、状態や内容などが変わる事、または変える事。変様。

「変様」 事物の形や様子が変化すること。変容。

これでは両者の違いははっきりしない。次に『広辞苑』（第五版）に当たってみる：

「変容」 姿・形を変えること。姿・形が変わること。

「変様」 ①事物の様態の変化すること。②〔哲〕（modification）実体が一時的の偶然的な形態をとること。

哲学の専門用語を知る分だけ、上の『日本国語大辞典』（第二版）よりも差異を示すことになるのだが。最後に『大辞林』（第三版）を見る：

「変容」 外観や様子などが変わること。

「変様」 事物の本質は変わらないで、その形や様子が変化すること。

『日本国語大辞典』のような大辞典はともかく、「国語辞典と言えば『広辞苑』」という「国民的合意」によるなら「変様」も認められるだろうが、小さな辞典しか見なければ、又、ワープロにだけ頼るなら、「変様」は拒否されてしまう。なぜなら、『岩波国語辞典』（第六版）、講談社『日本語大辞典』（第二版）、『三省堂国語辞典』（第五版）、大修館書店『明鏡』は「変容」のみだ。

上の大辞典では、『大辞林』（第三版）が「本質は変わらないで」と言っている分だけ、私の言う「変様」に一番近い。しかも、「変容」の方の語釈を「外観や様子」と限定している分だけ、「変容」と「変様」の差異の記述が一番はっきりしている。しかし、数ある辞典の中の1冊だけの記述である。

以上のような状況では「変様」がワープロで変換されないのは当然か？ しかし、使いたい語が制限されるのも困ったことだ。常用漢字表内の文字なのに。

3-5-2 句読法の変移

私はかつて、明治から平成までの句読法の変遷を垣間見たことがある。それは、ほんのわずかの文章によってだが、樋口一葉（1872〔明治5〕-96〔同29〕年）の『闇桜』（1892年）の句読点ゼロから、以後百年ほどで、豊穰で過剰な使用へと変遷が分かった。詳しくは拙著『コトバ——音と文字の間』のpp.130-7を参照して頂きたい。

句読法のこの豊穰性・過剰性が「モーニング娘。」という表記を生み出した。それは1999〔平成11〕年のことである。固有名詞にまで句読法を必要とする。もはや氾濫と言える地点まで来ているのではないか？ 仄聞だが、ある俳優は自分の名刺の名の後に読点を打っているそうだ。役者として未完成だという心をそこに託しているらしい。

ただし、大原則、句点と読点の2種類しか使用しない日本語の句読法に対し、他の言語に見られる多種類の句読法の存在を参考にして、豊かな句読法へと進めていきたいという観点は別である。

3-5-3 文章表現力の変移

ここでは、ひとつのアレゴリーを紹介すれば十分だろう。

山田洋次監督、渥美清主演の「寅さんシリーズ」第44作『男はつらいよ・寅次郎の告白』

(1991年)に次のような場面がある。

寅次郎が高卒の若者を弟子にした。タタキ売りのサクラに使うためだ。さて、寅がこの若者に一筆葉書を書かせようとする。「拝啓」と寅が口述筆記させようとするが若者は書けない。「カナでいいから」と寅は促す。次に「彼岸も過ぎて」と言うが、やはり書けない。「いいよオレが書くよ」と取り上げて、後は自分で書くという始末。要は、今時の高卒の無筆を笑っているのだ。(脚本は未見)

シリーズ第10作『寅次郎夢枕』(1972年)では、寅次郎は「恐惶万端ひれふしてお願い申し上げます」と書く(『男はつらいよ』, 第4巻, pp.100-1)。そのような寅の方がよほど学があるのだ。もっとも、この「恐惶万端(きょうこうばんたん)ひれふして」は、かなり高級すぎて、脚本を書いた人たちの銜学趣味がちらついている一文であることは確かだ。だが、同じ心を表わすのに「ともかく、かしこまって、両手をついて、頭を地につけて、礼をつくして」と言ったのでは、まことにしまりのない表現になる。

むしろ寅次郎らしい年賀状をここに1通紹介する。

新年おめでとうございます。／思い起こせば、旧年中は恥ずかしきことの数々、私、深い反省の中に新しき年を迎えておりますゆえ、本年もどうぞよろしくお願い致します。／車寅次郎拝

(第46作『寅次郎の縁談』(1993), 『シナリオ』, 1994年2月号, p.159)

古典的な、それゆえ、模範的な、一筆啓上の達意の年賀状ではある。

年賀の挨拶を「あけおめことよろ」ですませれば、それでよいと言う筋のものではない、と車寅次郎は身をもって示しているのだ。

学生に自分たちは使わない古風な表現をたずねた時のこと、SK(f)から次のような回答があった。中学生の時ボランティアで老人ホームを訪ねたが、その礼状の末尾に「かしこ」とあった。それが何を意味するのか全く分からなかった。「かしこまった文章ですいません」のような意味かと思ったりもした、と書いてあったが、その後分かったのかどうかについては、何も書かれていなかった。

手紙など書いたことのない者には、手紙専用の語彙「拝啓」や「かしこ」「～拝」など無縁である。

「今の若いのは文を書かない、と言うけれど、メールなどちゃんと書けるんだから、いいんじゃないですか？」と、ある劇作家が言っていたが、メールは文ではないだろう。あれは、大方は話しコトバを打っているだけではないか？ しかも、顔文字つきで。挙げ句「一億総幼稚化」などと評されなければ幸いではあるが。

さて、若者の携帯メールはひらがなの使用率が56%、漢字が22%、記号が12%、カタカナが7%の割りだそう。漢字の割合は、新聞では40%、雑誌では27%、テレビでは30%とのことで、携帯メールでの漢字使用率の低さとそれに見合ったひらがな使用率の高さは注目される。(『朝日新聞』, 2001年9月11日)

4 おわりに

繰り返しになるが、本稿では借用関係には一切触れなかった。これで現代日本語の姿を

語るのに不十分なことは重々承知だ。しかし、そこへ入り込むのは本稿の枠を遥かに越えることこれ又再言になる。

まとめ、と言っても管見にすぎないから、一斑を見て全豹をトす、の弊はまぬがれない。しかし、以上のことから多少のことを言えば、大体次のようになるだろう。

「3 生まれてくるコトバ」の中でも、それなりの消えてゆくコトバの観察を記述した。新しく生まれてくるコトバの陰に、消えてゆくコトバがある。衰亡・消滅と生誕・新生とは、表裏一体である。

すでに「1 はじめに」に書いたとおり、コトバが変わってゆくのは、人間が・社会が変わってゆくからだ。何もかも変わってゆくのだ。複合しているのだ。新しいものを求めて、人間がコトバを変えてゆくのである。こうして、人間は常に意識を変えようとしている。自分を変えようとしている。つまりは、コトバは人間そのものである。それなのに、普通には、その結果を「コトバが変わった」としか言わない。

コトバの変移を直視しながら、昔自分が使ったコトバを思うと、過ぎ去って行ったコトバがいとおしくなる。次の変移に思いをいたせば、今自分が使っているコトバにはますます愛着が強くなる。新規表現は、当然のことながら、foreign to me である。すでに「1-3「乱れ」と変移」の項で、コトバの純正主義者と寛容主義者について触れた。ここに至って、両者は全く別個の存在ではなく、今そこにあるコトバを見つめているという点で、共通した心性の所有者であることが分かる。しかし、その眼差しの向け方が異なっていることも分かる。

そしてなお、永遠に、コトバは変移しつづける。

参考引用文献一覧

『葵の上』（佐成謙太郎編『謡曲大観』，第一巻，明治書院，1982年）

『朝日新聞』

石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』（新潮文庫，1952年）

『岩波国語辞典』（第六版）（2000年）

『岩波新漢語辞典』（第二版）（2000年）

『NHK ハンドブック』（NHK 放送文化研究所編，2000年）

『小津安次郎全集』（井上和男編，上・下，新書館，2003年）

金原ひとみ『蛇にピアス』（集英社，2004年）

川上弘美『古道具 中野商店』（新潮社，2005年）

川口良・角田史幸『日本語はだれのものか』（吉川弘文館，2005年）

金田一春彦言語監修・関弘子朗読『朗読源氏物語』（大修館書店，1986年）

『言語』（大修館書店，1989年3月号）

『広辞苑』（第五版）（岩波書店，1998年）

『国語学大辞典』（国語学会編，東京堂出版，1980年）

笹島寿美『キモノのしたく片づけ』（神無書房，2003年）

『三省堂国語辞典』（第五版）（2001年）

『新語・流行語大全 1945 → 2005 ことばの戦後史』（自由国民社，2005年）
『全国方言辞典』（東京堂出版，1951年）
『全集樋口一葉』（小学館，1996年）
『大辞林』（第二版）（三省堂，1988年）；『大辞林』（第三版）（2006年）
俵万智『サラダ記念日』（河出書房新社，1987年）
戸村幸一『コトバの原風景』（駿河台出版社，1995年）
戸村幸一『コトバ——音と文字の間』（創英社／三省堂，2001年）
中村真一郎『恋の泉』（新潮日本文学48，1972）
夏目漱石『彼岸過迄』（岩波書店，全集第十卷，1956年）
『日本経済新聞』
『日本国語大辞典』（第二版）（小学館，2001年）
『日本語大辞典』（第二版）（講談社，1995年）
『平成12年度国語に関する世論調査 家庭や職場での言葉遣い』（文化庁編，2001年）
『平成13年度国語に関する世論調査 日本人の言語能力を考える』（同，2002年）
『平成15年度国語に関する世論調査 情報化社会と言葉遣い』（同，2004年）
丸谷オー『たった一人の反乱』（上）（講談社文庫，1982年）
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』（宮沢賢治全集7，ちくま文庫，1985年）
『明鏡』（大修館書店，2002年）
山田洋次『男はつらいよ』（立風書房，1976年）
山田洋次『寅次郎夢枕』（同，1977年）
山田洋次『寅次郎の縁談』（『シナリオ』，シナリオ作家協会，1994年2月号）
『山と溪谷』（山と溪谷社，2002年5月号）
『読売新聞』

(2007. 6. 3)

—Abstract—

Language change in present-day Japanese

The purpose of this paper is to describe changes in present-day Japanese: what have disappeared and what have newly appeared. I examine some features in its changing aspects: phonetics, vocabulary, semantics, syntactics and writing.

It is certain that the postwar social conditions and IT revolution have made a tremendous impact on the history of our mother tongue. However, language continues to transform itself, always, day by day. In Japanese, we can find a number of variations according to the age of speakers. The results show that the history of language is alternation of generations.

現代日本語の、ここ数十年にわたる史的変移を探る、これが本稿の目的である。

世代間のコトバの違いに対し、旧世代は新世代のコトバを「乱れ」と片づけてしまいがちだ。だが、乱れとは、消えてゆく、あるいは消えてゆかざるをえないコトバと、生まれてくる、あるいは生まれてこざるをえないコトバとのせめぎ合いである。乱れ、と言うよりは、それは、史的必然性をもった変移である。

発音、語彙、語義、語法、表記などあらゆる範疇での変移の様子を探ってみる。